

アクティブラーニングの方法

1 はじめに

2019年7月25日に東京大学 大学総合教育研究センター 栗田佳代子先生による「なぜ今、アクティブラーニングなのか ～力強く教育を変えるために～」という講演を聞くことができました。前半は、学習に対するモチベーションをいかに高めるかというお話、後半はアクティブラーニングについてのお話でした。アクティブラーニングでは2つの手法が紹介されました。ここでは、アクティブラーニングの手法について、私がこの講演で学んだこと、考えたことを記載します。

2 アクティブラーニング

(1) アクティブラーニングの理解において重要なこと

アクティブラーニングは手段であって目的ではない。

アクティブラーニングを実施する前に、または、実施した後に、次のことを確認したい。

- ・この方法は目的や目標に対応しているのか？
- ・この方法で何を学んでいるのか？
- ・この方法は効果的に機能しているのか？

(2) アクティブラーニングの方法

① 一人で考えてペアで共有する

与えられたテーマや質問について

- ・一人で考える(1～3分) /
- ・次にペアで共有する(2～5分) /
- ・時間があれば全体で共有する

※実施時のポイント:ファシリテーター

- ・ペアを作る補助をする。 /
- ・最初に話す方を決める。 /
- ・明確な指示を出す。
- ・時間があれば全体で意見を共有する。(受け止める。フィードバックする。)

長所 : 多様な場面で導入しやすい。 / グループワークへのスモールステップとして活用できる。

② 多肢選択問題の活用

短い講義または予習のあと、多肢選択問題を実施して、解説を行う。

授業展開例としては次の通り。次頁の図も参照してください。

ア) 短い講義を行う。

イ) 多肢選択問題を出す。

例) 地球が月を引っ張る力と月が地球を引っ張る力ではどちらが強いですか？

- a) 地球が月を引っ張る力
- b) 月が地球を引っ張る力
- c) 両者の引っ張る力は等しい。
- d) 地球と月には何の力も働いていない。
- e) 両者の力の関係は、そのときに月が軌道上のどこにいるかに依存する。

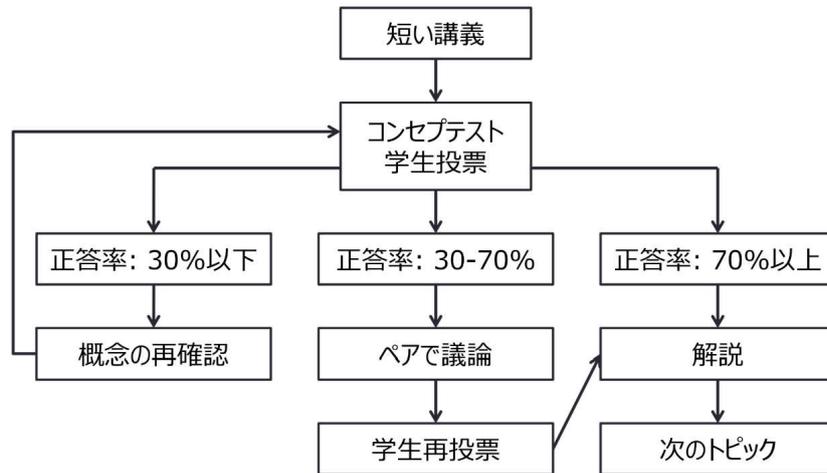
ウ) 挙手により多肢選択問題における生徒の答えの分布をつかむ。

エ) 正答率が30～70%なら、ペアまたはグループで議論する。

正答率が30%以下なら、再度、概念の確認を行い、多肢選択問題に戻る。

正答率が70%以上なら、多肢選択問題に対する解説を行い、次に進む。

- オ) 再度、挙手により学生の答えの分布をつかむ。
- カ) 多肢選択問題に対する解説を行う。
- キ) 次に進む。



(Lasry, 2008)

特徴

- 大人数でも活用が可能である。
- 即時の反応を活用しているところが特徴である。
- 理系科目のような知識獲得・応用に有効である。
- 多肢選択問題の質が重要である。
 - ・問題作成の意図を明確にする。
 - ・思考を伴う選択肢を用意する。

3 講演を聴いて、一学期を振り返ってみる。 ～ペアでの話し合いについて～

本年度(2019年度)は4月から、あるクラスの授業に定期的に入って、担当教員と共に主体的・対話的で深い学びを目指して取り組んできました。その一つが、1時間の授業の中に、ペアでの話し合いを3回、班での話を1回入れるということです。講演でもありましたが、話し合いをすることが目的にならないように配慮してきたところです。

講演を聴いて1学期の様子を振り返ってみました。ここでは、ペアでの話し合いに絞って記載します。4月5月に比べ、ペアでの話し合いにずいぶんと慣れ、「ペアで話し合います。」といった指示が出ると、さっと行動することができるようになってきました。そして、ほとんどの生徒はペアでの話し合いを始めます。しかし、ペアでの話し合いをしない、できない生徒が数名います。振り返ってみると、「どちらから話をするか」という指示が明確ではなかったときがあったように思います。どちらから話をするかを明確にすることで、ペアでの話し合いをしない、できない生徒の人数が減るのではないかと思いました。また、ペアや班で話し合うことの目的や効果を生徒たちに理解させることで、取り組み方の姿勢がこれまで以上のものになるのではないかとも思いました。これらのことを踏まえて二学期から取り組んでいきたいと思っています。